
とある重力の星殺し《スタースレイヤー》

白眉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある重力の星殺し『スタースレイヤー』

【NZコード】

N7875Q

【作者名】

白眉

【あらすじ】

無能力者、上条当麻。

そしてその友人たちの無能力者、鷹崎レイン。

青年は異能を殺し、青年は異能を隠す

一人の青年の、ちょっとしたお話。

物語四（前書き）

マンが買つて読んでたら書きたくなつたので書きました。

相変わらず無謀です。でもつて調子に乗つてます。

しかも大まかな地盤がマンガとウイキ頼りです。

お粗末になる事請け合いでですがそれでも生温かく見守つていただけると幸いです。

では、どうぞ~

七月十九日

「みなさん。明日からお楽しみの夏休みなのですよ～」

教壇に立つてそう説明するのは、およそ教師どじろか大人にすら見えない小柄な女。

1年7組担当　月詠　小萌

「まち学園都市から出る人はちゃんと申請書を提出してくださいね。お家に帰省する人もちょっとお出かけする人もですよ～。」

発する声も子供のそれに近づいてか舌足らずに聞こえる。

2つ隣に座る関西弁なんかはこの声に対してハアハアと荒い息遣い。ハツキリ言わなくても氣色悪い。

「それから念のため　　外での”能力”の行使は絶対禁止なのですよーー。」

この晝葉を皮切りに、いよいよ学生生活の大イベント、夏休みが開始された

「当麻」

俺は廊下を出て、前方を歩いていた男に声をかける。

「おひ、レイか」

男 上条当麻は振り返って返事をした。

俺は当麻の横に並んで一緒に歩き出す。

「いや～、ようやく夏休みだな。明日から何すつかな～」

楽しそうに、でもつて呑氣そうに当麻は語る。

「いや、お前の場合は……」「

「あ、小萌センセー。さよならー」

俺の言葉を遮りて、当麻は見かけた月詠に挨拶をする。

「はーい、上条ちゃん」

「また明日」

フリーズ。

満面の笑みでそう返した月詠の返答に当麻が一瞬固まる。

「え・・・?えええ~~~~~!~?今なんと!~?」

「んむーー、聞いてなかつたんですか?明日からの指定者補習。このままじゃ留年決定かもですよ。特に、“記録術”^{かいじゆつ}の単位が。

「

オールレッドです、と月詠が付け足すと、当麻は心底うごめいた
ように溜息をつく。

「……」で補足説明。

記録術かいじはつと言つのは、俺達が住む学園都市特有の時間割の一つだ。東京西部の未開拓地を切り開いて作ったこの都市の至上目的と言つてもいい。

表向きは記録術や暗記術なんて言つてるが、その実は薬とか電氣流したりして人為的に“超能力者”を作るつづつぶつ飛んだ話だ。

個人によつて発現する能力にはバラつきがあるが、一通りこなせば大概はスプーン曲げ位はできると言つからひざけた話である。

要するに、学園都市は“一大能力開発機関”でもある訳だ。

「ちなみに、鷹寄ちゃんも補習者リストに入つてますからね？」

「あ？ちよつと待てちびっ子。俺は別に赤点なんてねーだろうが

「またセンサーの事をそういうふうに言つて！鷹寄ちゃんは口が悪過ぎます！それに！確かに鷹寄ちゃんは成績優秀ですが、出席日数が壊滅的です！…」

頬を膨らませて言つ月詠。

「別に俺が何しようがカンケーねーだら」

面倒くねー、やや適当に返す。

ちなみに、俺の場合は一口バッくれるか午後からいなくなるかのど
つちかが多い。今日みたくしっかりと終わりまで顔を出したのは珍
しい方だ（終業式だったので珍しいもクソも無いとは思つが……）

「うう・・・上条ちゃんからも何とか言つてください……」

涙田で当麻を頼る用詠。生徒任せにする教師つひとつのもどりなんだ?

「まあまあレイ。あんまし小萌センセーをいじめてやんなよ。それ
に、俺もレイがいてくれた方が色々助かるし。な?」

両手を合わせて当麻が懇願する。別にいじめてた訳じゃ・・・つか、
後半お前の願望じゃねーか!

「・・・はあ。明日から一週間だったな?」

「一来てくれるんですね!?」

「いかねえと当麻が干からびそつだしな・・・別にあなたの為じや
ねえ」

「やっぱレイつてシンデレだよな」

「殴るぞーー！」

つたく・・・まあ、結局はこいつの言ひ事を聞く俺が、甘いって訳か・・・。

所変わつて学園都市の街並み。とりあえずぶらついてる俺達一人だ

が、隣で当麻が低血圧な溜息を吐く。一晩つかよくなじまでも息が続くな・・・。

「また目隠しポーカーとかスプーン曲げとかやらされんのか……出来るまで。ふ」――だ――・・・・

「別にそんな氣い落とす事でもねーだろ?」

「お前は良いよ、できるから。俺なんて一回も成功したためしねえし……どうせ俺は無能力者だよ」

「俺だつて特筆するようなもん持つてねえんだから、お互い様だろうが。しつかりしろよ」

「ああ～～～・・・ふ」――だ――・・・

「カビ生えるぞ・・・」

当麻の周りから負のオーラが溢れ出ている。この湿っぽさ加減はある意味能力かもしれない・・・。

と、ふと当麻が急に立ち止まる。目線の先にはファミレスの店先に出してある“新メニュー”的看板。

「…………」一度にいし、飯にするか。一品へりこなり奢つてやる。

「マジで…？ さうがレイ…お前のやつこいつとこ大好きだ！ 結婚してくれ…！」

「ハゼラベ」

犬じりみたいに田を光らせる当麻をあしらつてフアミレスに入る。

「 まつ、丸々一学期分のサボりが一週間でチャラになるなら、
安いもんだよな！」

「前向きだなお前・・・」

あるいは能天氣とも言つ。

「ハシャ――――せつかくの夏休みだ――景氣づけにブワーッ
とムダ食いでも」

ブワーッ

丁度当麻の言葉と重なるように、カヨイトレスが持つてきた飲み物
が当麻の頭に降り注ぐ。

ずぶ濡れになる当麻。頭を下げるカヨイトレス。当麻のウニ頭に消
えていく紅茶とコーヒー。

この場合紅茶とコーヒーがホットじや無かつたのはある意味不幸中の幸いか・・・？

「よお、ねーちゃん一人い／＼？」

「聞いてんのかオラ！！」

当麻がもらったタオルで顔を拭いていると、聞こえてきたのは野太い声。

田をやれば、そこには中学生らしき女学生と、それに絡む見た目明らかな不良が複数。

女生徒の方は不良どもに対し無視を決め込んでいるらしく、それが不良の神経をより一層逆撫でしている。

「あれは確か、常盤台の・・・」

ガタツ

ふと呟くと、当麻が不良たちの方を見ながら席を立つ。

「ーおいつ当麻！！」

「あんなの見てほっとけるかよ！！」

そう言つや否や、当麻は不良たちが絡んでる女生徒の席へと向かってしまつた。

「つ、バカがつ・・・!」

そこから先は、当麻が不良どもに難癖をつけて、不良どもが当麻を追いかけて、俺はファミレスの代金を払ってから当麻達を追い掛けた。

ちょっとした逃走劇が展開されるが、まあ特に話す事も無いのでここいらの話は省くことにする。

こんな感じに、バカでお人好しな無能力者の友人、上条当麻と。

同じく、バカでお人好しな無能力者のこの俺、鷹竜の物語は、何の脈絡も無く始まつてたりした。

番組目（前書き）

御坂の口調とか当麻のキャラとか全然だわ・・・。

でもってオリキャラ視点がまだ続く

「おらあああああーー！待てやクソガキヤアアアアーー！」

「ぶつ殺したらあああああーー！」

学園都市の橋の上。殺氣満々の不良どもから逃げる近麻。でもってそれを追いかける俺。

かれこれ小一時間は走りっぱなしだ。さすがに疲れる。

「ちくしょー！何やつてんだ俺は！？人助けなんて余計な真似しないや良かったぜ！！」

自業自得だ。諦めろ。

「つかいーかげんしつナーんだよーー」と倒れやがれってんだ
！」

「やがましい！！女の前でカツコつけやがつて……」の逃げ足大王が！！！」

先頭を走つてたツルッパゲがゼエゼエ息を切らしながら叫ぶ。

逃げ足大王・・・言い得て妙だな。

ただこの場合、当麻は別にかつこつけたいがために不良に難癖をつけた訳じゃない。

ボンッ

突如、前方にて爆発音。何か破裂したらしく、直撃をくらつたツルッパゲは痛みに悶絶している。

「おい、今の・・・」

「発電能力か・・・？」

「レベル高そうだぞ・・・」

「やっぱくねえか・・・？」

いきなり仲間が怪我をこづむり、他の不良どもは当麻が何かしたの

かとつるたえる。

無論、無能力者の当麻には発電能力なんて芸当はできない。

「くそっ…覚えてやがれ！…」

頭から煙を上げて氣絶しているツルッパゲを抱えて、不良どもは雑魚キヤウの「」とき捨て台詞と共に退散していった。

「うわああ…・・・・」

一連の流れから、当麻は目頭を押される。確かに今のあいつにとっては頭が痛いだろ？

俺の方からも見えたが、爆発の一瞬前に後方から電撃が走っていた。発生源は恐らく

「つたぐ、何やつてんだか」

俺や当麻の後方。聞こえたのは女の声。

振り返った先にいたのは、先程不良に絡まれていた常盤台の女生徒。

「！」の私からあんな不良を庇つたりして、善人気取り？

女生徒　御坂美琴は、そう言って当麻に喰つてかかる。

対する当麻は至極めんどくわざつに溜息を吐く。

「何なのよそのタメ息は！－！」

案の定、御坂は当麻の行動に腹を立てる。

「つたぐ・・・あんたもバカにしてるわね」

当麻の顔を覗き込むように御坂は喋る。

「私を誰だと思ってるわけ？学園都市でも7人しかいない“超能力者”なのよ？」⁵

そう　　御坂美琴は、この学園都市内でもたつた7人しかいない最高ランク、超能力者なのだ。^{レベル5}

能力は電撃操作。名を“超電磁砲”⁶。

何故、女子中学生にこんな物騒極まりない名前がついてるのかと言えば、それは彼女が扱うある得意技に由来する。

「・・・つーかさ。俺はスプーンの一本も曲げられない正真正銘の“無口”能力者だぞ？それを事あるごとにムカつくだのボコボコにするだの　何なんだお前は？」

不満げにブー垂れる当麻。まあその疑問も最もだらう。

「ゼロ、ねえ・・・ね？“超電磁砲”って知ってる？」⁷

「あん？」

「金属の砲弾を音速の数倍とかの超高速で打ち出す兵器だな」

「へえ・・・」

説明を挟んでみたが当麻はいまいち理解しかねてるらしい。返答が生返事だ。

対する御坂は少しだけ感心するよつてひりて興味の視線を向けてきた。

「やうそれ。本来は電源とかの関係で結構大型になるらしいんだけど」

言いながら、御坂はカバンの中をまさぐる。

そこから取り出したのは、ゲーセンのメダル「一ノ一人」とかにあるコインが一枚。

「いやこののを言ひつけのよね」

ピンチ

親指に弾き上げられたコインが回転しながら宙を舞つ。

直後、空中のコインが急に電気を帯びる。

落下と共にその強さは増し、丁度御坂の手の前まで落ちてきた瞬間、
閃光が最高地点に達する。

瞬間、コインは文字通りの砲弾となつて、衝撃波を伴いながら光の
軌跡を描く。

後に残つたのはコインが通つた痕。数十m先まで続く、深く抉られたコンクリートの道が、その破壊力を物語る。

これこそ、御坂が“超電磁砲”と言われる由縁である。まさに歩く人間兵器。人に向けて撃てば体が木端微塵だ。

もつとも、それは一人の例外を除いてだが。

見れば、当麻はこの惨状を目の当たりにして顔面蒼白だった。まあ、普通はこうこう反応だろう。

そんな当麻に向け、御坂が雷撃を放つ。

雷とみまがいばかりの閃光が、容赦なく当麻を飲み込む。

立ち込める煙。先の光景を見れば、誰もが当麻が無事であるはずがないと思うだろ？

「あれだけの電撃喰らって なんであんたは無傷なのかしら？」

しかし、晴れた先に立っていた当麻には傷一つなかつた。

当麻は、右手を前にして、腕を交差させるように防御の態勢を取っていた。

皮膚どころか、来ている衣服には焦げ目さえ付いていない。

それが異能の能力ならば、

神様の奇跡だろうが問答無用で打ち消す能力。

幻想殺し
イマジンブレイカー

当麻が電撃を防げた理由はこれにある。

「まったく……そんな能力、学園都市の書庫にも載つて無いんだ
けど」

ジンが無能力よ、と御坂は惡々しそうに言つ。

確かに、超能力者が32万分の1の天才だと言つなら、当麻の幻想
（イメージ）
レベル5
（ブレイカーレベル）
殺しは230万分の1の天災と言えるだろう。

「あたしは！自分より強い存在がいるのが許せないの！！」

「結局ソレかよー！」

再び放たれる電撃。今度は今範囲に広がり、当麻に襲いかかる。

悲鳴を上げながら、当麻は必死に電撃から逃れようとする。

「てかレイ！…さつきから傍観してないでお前も止めてくれ…！」

「無理」

「即答！？」

ぶつちやけ右手で全部防げばいいと思うが、そう簡単にも行かないだろう。

当麻が持つ幻想殺しの効果範囲は「右手首から上」だけ。

当然そこ以外に当たれば痺れるだらうし、あんな威力の電撃まともに食らえば即死だ。

そんなもんが自分に向かつて飛んでくるんだから結構怖いと思つ。そりや逃げたくもなるわ。

「・・・つたくしじうがねえ・・・」

呆れながら、俺は電撃を放ち続ける御坂の、かざされた手首を掴む。

「おー、その辺でやめとけ

「何よ、邪魔する気?」

途中で邪魔されて、御坂はかなり気が立つてゐる。

思えばこの時、どうやって止めるかをまともに考えてなかつたのが不味かつたんだろう。

「なんべんやつても、お前の力じゃ当麻には勝てない。諦めろ

「……？」

「ちよーーーおまつ

」

「ふざけんな——————ひ————」

その日、学園都市で一部停電が起きたらしいが、丁度その時に、
“ 橋の上から落る雷 ” が田撃されたとか。

「あああ・・・くそつ。あちこ・・・」

蒸し暑さから田が覚める。現在時刻は7時半。昨日からの氣だるさを引きずる体を、伸びをしながら解す。

昨日はあのくそ女のせいで散々だった（髪が少し焦げた・・・）。

奴が放った電撃により、橋から一定範囲内では停電が起きた。俺が生活しているこの学生寮もその例外ではなく、悲しくもエアコンが壊れるというこの猛暑には死刑宣告に等しい状況に陥つてゐる訳だが。幸いなのは偶然有つた予備のバッテリーのおかげで、冷蔵庫の中の食材はみな生き残つたと言う所である。

「当麻は・・・ダメだろうな・・・」

自称不幸体质のあいつが予備バッテリーなんて都合の良いものを持つてゐとは思えない。

「どうあえず起^ひこ^うに行^くか・・・」

蒸し暑^{ひん}い可^かまれながら、俺はちやつちやか制服に着替えて部屋を出^でる。

当麻の部屋は俺と同じ^ひの学生寮の二階。と言つかお隣さんだ。

あこつと俺との縁はいつ平^へ凡^{たん}な所が切り掛けだったりする。

色々考えても間に当麻の部屋の前に立つ。

「お~い、当麻~・・・」

チャイムも鳴らすが一向^{いっこう}に反^{はん}応^{きみ}無^いし。

「つたぐ・・・おこーつといと起きあひー補^ほ留^り行^くくんだらつがーー..」

音を立てれば起きあひだらひアに手をかける。

あるどどひだ。ドアが内側に開きやがった。

「掛け忘^{うな}れか?・・・つたぐ抜^ぬけてやがんな・・・」

呆^{あき}つづアを押し開け、中に入る。

「当麻~?起きてんのか~・・つて臭つ!~?」

何か奥から酸っぱい臭いがある。ビクとも俺の予感は的中したらしい。

その時の本人も、どうやら奥に居るようだが・・・？

「当麻？何やつて

」

ベランダにいたらしい当麻の姿を発見し、近づき、俺は言葉を失つた。

ベランダにいたのは、明らかに状況を飲み込めていない表情をした当麻と。

あたかも干された布団の如くベランダの手すりに引っ掛けている、白い修道服のガキだつた。

参話四（前書き）

最近ゲームにうつつをぬかしてばかりで、すっかり執筆が滞っています。おまけにキャラの崩壊っぷりは相変わらず。

では、第3話。

どうぞ

「おなかへった」

・・・・・

「おなかへった」

・・・まあ、あれだ。

「おなかへったおなかへったおなかへった」

今どういつ状況なのかを説明すると、だ。

「おなかへった、て言つてるんだよ。」

田の前で修道服のガキが転がりながら空腹を訴えている。

・・・・何なんだこの状況？

「だつてよ当麻」

「え？俺？俺に振るのー？」

「だつてひいお前の部屋だし・・・」

そう。俺がいるのは自分の部屋、ではなく、その隣の当麻の部屋。
寝ているであるう当麻を起しつゝ部屋を訪ねてみれば、どうこうわ
けかこんな状況に陥ったのだ。

「とつあえずだ。当麻、一つだけ呴してやる

「な、何だよ・・？」

何時になく真剣な力オ（のつもつ）の俺に、当麻は少し緊張し、息
を飲む。

「白首は早めにな?」

「ちつげええええええーー！」

俺なりの最良のアドバイスに、当麻は絶叫する。至近距離で聞いて
た俺はもうろん、修道服もいきなり叫ぶもんだからかなりビビって
いる。

「チゲ？ 何？ お前も腹減つてんの？」

「違ひつひつーにーてか白首つてなんだよー。別に俺は警察のお仕事になる様な事はこれっぽっちもしてねーよーーー！」

「朝つぱらから五円蠅いで、当麻」

「お前の所為だろが！！」

ズビシィー、と擬音が付きそうな勢いで、当麻は俺を指さす。

つつともなあ・・・・・朝起きたら修道服着たガキがベランダに干してあつたとか、普通は信じないと思うが。

信じたくないが、当麻が何か良くない事をした結果とかのほづがよつほど説得力がある。

「おなかいっぱい飯を食べさせてくれると嬉しいなーーー！」

悩みの種たるこのガキは今だ飯の催促をしてくる。大概呑氣だなこいつも・・・。

(で? ビうする気だ当麻?)

(俺に聞かれてもなあ・・・。できれば俺も関わりたくないし)

アイコンタクトによる会話。確かに、関わればほぼ100%厄介事に巻き込まれることになるだろう。

ふと、後方にあるガキに目を戻す。

もの欲しそうな視線、指を咥えてある一点を見つめている。視線の先に立ったのは、当麻の足元にてプレスされていた焼きそばパンが。恐らく傷んでいるのであらう、ちょっと酸っぱい匂いがした。鼻の奥にツーンとくる。

当麻はそれを、少し顔から離しながら持ち上げる。

「・・・これが？食う氣か？・・・よし！たあーんと喰え！ムサボリ喰え！－」

(当麻お前・・・いくらなんでもそれは・・・)

(ふつふつふ・・・さすがにこの酸っぱい匂いを嗅げば裸足で逃げ出すだろ！？)

当麻はざら本氣で関わりたくないらしい。目にカエレとか書いてある。

が、次にこの修道服のガキが取った行動は、俺達の期待を裏切った。

「ありがとう！君いい人だね？」

「えー？いや、あの・・・」

腐りかけのパンを差し出されているにもかかわらず、ガキは満面の

笑みでそつ返す。

予想外の反応に当麻がうろたえる。

「いただきまーす！ー」

「ちゅっ・・・・」

ガブッ

喰らい付いた。それも一口で。しかも当麻の手だと。

ぎやああああああああ・・・・・・

木靈する当麻の悲鳴。どうでもいいがまだ早朝だぞ？当麻。

あれから俺と当麻はとりあえずこのガキに手当たりしだいの食い物を『』えた。

コンビニ弁当やうな詰め物やら漬物やら。手当たりしだいに食いつくす様はさながらブラックホールみて だった。俺の部屋の冷蔵庫の三分の一まで消費されたのはかなり痛い……。

とりあえず閑話休題。

まずは菓子袋に手を突っ込んで何が何でもこの正体をハッキリさせなければならんだろう。

「…………で？お前は一体何なわけ？」

「む・・・私はお前なんて名前じゃないよ？“インテックス”って言つた前があるんだから」

インテックス
目次？

「見ての通り教会の者なんだね！－！」

「いや明らかに偽名だろーが！－！」

「あ、バチカンのじやなくてイギリス清教の方だね！－！」

「聞いてねーよーー！」

おちゅくつてんのか」のガキ・・・・。

（なあ、レイ。なんか変じやないか？）

（あ？何がだよ？）

（だつて、どう見ても学園都市の人間じゃないし・・・こんな子供
が都市の警備を強い潜つてこられると思つか？）

確かに、当麻の疑問ももつともだ。育脳なんてやつてるから当然な
んだが、この学園都市の警備つづーのは見た目以上に厳重だ。

人の出入りは門^{ゲート}で完全に走査されんし、空の上には工業大学が打ち
上げた監視衛星まである。

記録と一致しない人間が都市内に入つたとなれば、
員^{ヒト}がすぐに駆け付ける筈だ。
警備員^{アンチスキル}や風紀委^{ジャッジメ}

（大方、昨日の停電で、ゲートが機能しなかつたってオチだろ？）

まったく・・・あの女も随分な事をしたもんだ。

（焚き付けたのはお前だからな？）

「つむせよ当麻。

「で？何だつてお前はベランダに干してあつたんだ？」

「・・・・・」

途端に俯いて黙り込むガキ インデックス。

「だんまりか?」

「レイ、あんま詰めよんなつて・・・・・

「干してあつたんじゃなくて・・・・落ちたんだよ?」

「落ちたあ?

仮にも「こは」階だぞ?それよりも上から落ちるとか、どうこうシチュエーションだ?

「追い詰められて
撃たれてね

・・・」つやこよこよキナ臭くなつてきたな・・・

“何者”かに追われる修道服の子供。

撃たれたと言つて指した背中には、血の痕はおろか、穴一つ無い。

俺も大概当麻が首突つ込んだ厄介事に巻き込まれた方だが、ここまでのスケールでのかさは稀だな・・・。

隣からは、緊張からだらう、当麻の息を飲む音。

「私は『禁書目録』^{インテックス}だから・・・私の持つてる10万3000冊の魔導書。それが連中の狙いだと思う・・・」

言葉を紡ぐインデックス。恐らくこれ以上聞けば、多少なりとも引き返せなくなる。

「連中つて・・・？」

それでも、当麻はインデックスに問うた。単純な好奇心からか、あるいはこいつの性質^{おひとよし}からか、あ

「マジックキャバル
魔術結社だよ」

・・・・・。

「魔術ね・・・。はあ・・・」

「はああああ～～～～！？」

絶叫その一。

「真横で叫ぶな当麻。耳が痛い」

「ああ、わりい・・・でもよ、レイ」

「だな。さすがに“魔術”となるとどうしようもないな」

俺達にとつては至極当然の結果。

インデックスは、そんな俺達を見て、少しだけ驚いたような、落胆したような。そんな、よく解らない表情になる。カオ

「“世の中不思議なことなんて何もない！！”
ないけどさ・・・」

とまでは言わ

「まあ、バイロキネシス発火能力とかクレアボイアンス透視能力とかの「異能の力」があるくらいだ
しな」

「・・・頭^{いのち}なしに否定するってわけでもないんだね

それはそうだ。この学園都市では超能力なんてものがある。

人間の脳など結局は電気信号^{でんきしんごう}の発信源にすぎない。そこに少し細工^{ほそご}を施すだけで簡単に「開発」できてしまう様なシンプルなものだ。

しかも、その全ては科学的根拠^{けがくてきねんきゆう}に基づいて証明できるものだけだ。

人は、理屈^{りくせつ}が無ければ事実^{じじゆ}を受け入れられない。たとえ魔術^{まじゆ}が存在^{リアル}すると言つのが真実だとしても、そこに理由や根拠^{ねんきゆう}がなければ信じない。

理屈^{りくせつ}が無ければ、妄想^{もうそう}だと判別^{はんべつ}し、非現実^{ひげんじゆ}だと否定^{ひねん}し、拒絶^{きじやく}する。

そうでなければ、MP消費^{エムピーフューソウ}して死人が生き返るなら、誰も「育^{かいはつ}脳^{のう}」なんて馬鹿^{ばか}馬鹿^{ばか}しくてやりもしないだろう。

だから、魔術^{まじゆ}は信用^{じゆよう}できない。その口^{くち}を俺と当^{とう}麻^まはインデックスに伝える。

「・・・でも、魔術^{まじゆ}はあるもん」

途端^{とたん}にインデックスは頬^ほを膨らませる。

「魔術^{まじゆ}はあるもん！魔術^{まじゆ}はあるもん！あるもんあるもんあるもんあるもん」「が

つ！」「

「んなに言つんだつたらなんかやつてみやがれつてんだ！！触れずにホウキ動かしたりとか！魔法の杖出すとか！！」

「わ、私は使えないもん。魔力が無いから・・・」

「はつ！無理なんじやねえかよーダサッ！！結局は口だけかあ！？」

「お、おいレイ・・・」

「う~~~~ふ、ふーんだ！！そつちこせ、超能力なんてエラソーにっ！君達だつて何ができるつて言つの？」

「ああ！？」

「超能力は信じるのに、魔術は信じないなんて・・・へん！」

ブチツ

何かが切れる音がしたがまあ気にしないでおこう・・・まあ、握り拳に力を込めて、今万感の想いを込めて振り上げて

「！待てレイ！…さすがに子供相手にそれは不味ーい！！」

振り下ろしつとした瞬間に当麻に後ろから羽交い締めにされる。

「放せ当麻！…」のガキいつぺんぶん殴る！…」

怒りに身を任せた『わやこ』の『わやこ』の言つてはいるが、突然インテック
スは台所へと姿を消す。

「何だ・・・?」

「あ、ああ・・・・?」

数秒後。

「「「...」」」

戻ってきたのは包丁を握りしめたインテックス。

何だ!/?ドメステイックか!/?バイオレンスなのか!?

「ちよ、ちよっと待て!落ち着け!..」

「悪かった!俺達が悪かったから!..そんな危ないもん仕舞つて!..」

途端に下手に出る俺と当麻。だつていきなり刃物持ちだされるとほ
思わないだろ?

「刺してみて」

・・・本田一度田のフワーズ。

あれか?…どうどう頭がおかしくなったのか?

「IJの修道服は「教会」としての必要最低限な要素だけ詰め込んだ
「服の形をした教会」なの!! 布地の降り方、糸の縫い方、刺繡の
飾り方まで…・・全てが計算されてれるんだよ!!」

自信満々で言うインデックス。

・・・ええっと・・・つまり何なんだ?

「布地はトリノの聖骸布をローピーしたものだから、強度は法王級な
んだよ? 銃で撃たれても、包丁で刺されてもへっちらだもん!!」

ほお・・・そんな便利なもんがあんのか。見た目完全にただの修道
服だけだ。

「だからほりーこれで私のお腹をおもにしつきり刺してみるーー!」

なるほどねえ・・・だつたらブツ刺しても平氣か

「つてアホか! ?んなことできる訳ねえだろーー!」

「良いからー遠慮しないでーー!」

いつもの言ひ分も聞かずインデックスはぐいぐいと包丁を押しつ
けてくる。

「だからあぶねえって！……あ

押され押し返されを繰り返していた包丁はふとした拍子に俺達の手元を離れ宙を舞う。そしてそのまま・・・

サクッ

「痛えええええ―――――――！」

当麻の足へと直滑降。

さすが不幸体质・・・」この手の災難を磁石みてえに吸い寄せるな・・・。

「大丈夫か？当麻」

「うう・・・サックリいつてやがる・・・」

後で絆創膏でも貼つとけ。

・・・やつ言えば・・・。

「なあお前、俺らに何が出来るかつったよな？」

「？」

「こいつ 当麻の右腕な。“幻想殺し”つつって、それが異能の力なら超電磁砲だろーが神の奇跡だろーが打ち消せるつーシロモンでな」

「そりゃ！俺の右手であいつの服に触れば・・・」

「そりゃ。こいつの話が本当なら、右手で触れば木端微塵にでもなるつてわけだ」

「ふ〜〜〜ん・・・・まあ、彼の力が本つ当な・ら・ね？」

そりゃってインデックスは偉そうに鼻を鳴らす。

このガキ・・・・その態度も今のは内だ！！

「行け！当麻！！」

「応よ！..!喰らえつ！..!」

勢いよく右手を振りかぶる当麻！..!今その魔手がインデックスに迫る！..!

ボスッ

・・・・・シーン・・・・・・

「「「・・・・・」「」」

「・・・何も・・・起きないな・・・」

「・・・や、やつぱり！幻想殺しなんて嘘つぱちなんだね！！」

「ああ！？ てめエの方こそなんも起きねだろーが！－！」の大ホラ吹
きが！－！」

「なにおーー？」

「なんだ！？」

「ちょつ！？ 落ち着けつて二人とも

バサツ

「え？」

「は？」

「ん？」

何やら布か何かが落ちた音。

気づけば、腰に手え当ててふんぞり返つてた筈のインテックスの白い素肌が露わに まあ要するに素っ裸になつた訳だが。

場の空気が凍結したよつた感覚。

そんな中でも俺ら一人の視線はインテックスに集中しているわけで。

インテックスの尻屁にじわじわと涙が溜まる。

次の瞬間、インテックスはその白い歯を剥き出しに襲いかかってきた！…そこで俺が取つた行動は

「当麻ガード！…！」

「ちよー…レイおまつ…つじめやああ————…」

早朝にして三度目の当麻の叫びが木靈した瞬間だった

「がつづり噛まれたな～・・・たぐひでえじとしゃがむ」

両腕の至る所に歯形をつけられた当麻を見て、そう呟く。

「いや酷いのはお前だからな？」

アーアーアー聞こえない聞こえない。

さて、獵奇的噛みつき少女の方はと言えば

「・・・・・」

落ち込んでる。そりゃもう谷よつも深く。

渡した安全ピンでぱりぱりになった修道服を繋ぎとめようとしてる姿を見ると、何かこいつ今まで哀しくなってへんな・・・・・。

（それにしても・・・・・）

木端微塵にはならなかつたが、修道服がバラけた^{イコール}幻想殺しが反応した。

それはつまり、インデックスの話す事が満更嘘じゃないことの証明になる。

（魔術だの魔導書だの・・・1から10を信用する訳にもいかねー
が・・・・）

「うわっ！－レイ、時間時間！－」

「あん？」

慌てふためく当麻に促され、時計に視線を移す。

見れば、既に時刻は8時半を回っていた。

「おお・・・大変だな」

「なんでそんな香氣！？」

「いや・・・だって俺バイクあるし」

「なぬーー！？卑怯だぞレイ！自分だけーー！」

「一体どう卑怯だつづうんだ？」

「なあレイ頼むーー俺も乗せてつてくれーー！」

「やだね。お前も乗せると途中で事故りそっだし」

「そこを何とかーー頼むーー！」

必死になつて当麻は俺の脚にしがみつく。

「ええいしつこーー！こんなことじつてる暇あつたらさつと行けーー！」

「！」

「畜生！レイの薄情者！人でなしーー！」

俺に冷たくあしらわれた当麻は、泣きながら（無論嘘泣き）部屋を

出て行けりつとある。

グギッ

「 っ……」

唐突に響く痛々しい音。じつやひ慌てて駆け出した当麻が壁に小指をぶつけたらしく。

余りの痛さに声も出さずに悶絶する当麻。打ち付けた足を抱えてピヨンピヨン飛び跳ねている。

「うとうつ」

おもむろに当麻はバランスを崩し、そのまま体全体で床に向かってダイブする。

パキッ

「あ」

今度は何か固いものが割れる音。崩れ落ちる瞬間、俺が見たのは当麻の尻ポケットから落ちる携帯電話。つまづこじから導き出せられる結果は

「あーーーっ……」

・・・つまりはもう二度と無い事だらう。

「うう・・・不幸だ・・・」

哀れ鉄屑ガラクタと化したケータイを見て当麻はそう呟く。

「クスッ。なんか彼、不幸つて言つよつドジなだけかも?」

俺の横にいたインテックスは、少しだけ愉快そうに口元を緩めて言つ。

「・・・まあ、否定はしないな」

当麻の場合、あいつのそそかしさとか要領の悪さも原因の一ツだつたりする。今だつて片足で飛びはねたりするからだと俺は思つ。

「・・・それじゃ、そろそろ行へね?」

「行くつてビーハー」

「うへん・・・とつあえずは近くの教会かな?」

そう言つて、インテックスは玄関へと向かう。

「一おいーど行くんだ!?」

「出でくの。もたもたしてたら、いつ敵が来るか解んないしね。・・・
・・・飯、ありがとね」

軽い。

“敵が来るか解らない”なんて、そんな事を軽々しく言つてのける
こいつの顔は、悲愴でも恐怖でもなく、笑っていた。

「待てって！お前、行く当てあんのかよ！？よく解んねーけど、追
われてるんならウチで隠れてりゃ良いじやねーか！！」

「ダメだよ・・・“不幸”になるよ?」

引きとめられたインデックスは、一度当麻に向き直る。

「さつきはドジなだけなんて言つたけど、『幻想殺し』なんてもの
が本當にあるなら、神様の御加護とか運命の赤い糸とか

「そいつた物もまとめて済してしまつていつてゐんだと思つよ。」

それってつまりは・・・

「つまり、君の右手は、どんどん『幸運』の力を消していくわやつ

卷之三

ここにきて明かされた衝撃の真実。なるほどね・・・・それならこ

「今までいろいろあるのも納得がいく。

当の当麻本人はと言えば、相当シヨックらしく、何かものすごい顔をしていた。字面だと説明できない作者の表現力の無さが憎い

「…………マジっすか…………？」

へなへなと崩れ落ち、両手を床に付けて落ち込む当麻。

ふと、当麻は自分右手を見る。その手のひらには、誰かが吐き捨てたのであらうガムが張り付いていた。

「…………びづやひ本当らしいな、当麻」

「ね？立つてるだけでそれだもん。私と関わったならおそり

「いや……それとこれとは関係ない……」

落ち込んでたはずの当麻の語調が、不意に強まる。

「危ない間に会いつて解つててーお前を外になんて放り出せねーだろうがー……」

「…………」

「当麻…………」

まったく、相変わらずのお人好しだ。

でも、そんなことだからさあ、俺は好ましいと思つ。

「じゃあ

「私と一緒に、地獄の底まで付いてきてくれる?」

その後、インデックスはどこかへと向かった。

あいつの言った通りなら、教会を田舎していったんだろう。

その時のあいつの表情は、少しだけ悲しそうで。

それは、即答できずに言葉を失った俺達への失望か。

あるいは、今まで経験してきたからと云う、諦めからか。

何にせよ、インデックスはどこかへと消えて行つた。

ただ俺は、あんな子供が、“地獄の底まで付いてくれるか”などと言つた事に。

“地獄”なんて言葉を使いたくなるような状況に、あいつはいるのかと言う事に、戦慄を覚えた。

余談だが、俺達二人が補習に遅刻した事を、ここに伝えておく。

参詣目（後書き）

はい。と言ひ訳で第3話。

いかがだったでしょうか？

・・・と言つたかですね。私にギャグのセンスとかは一毫も無い
いと。

力使つたりとか戦闘とかはまだ先になりそうですが・・・ではで
は

四話目（前書き）

とあるへに投稿するのも約4カ月ぶり・・・お待ちしてくださった方には長々と空けてしまいますみませんでした。

あれから色々な内部構成や設定を練り直してみると雑な点が出るわ出るわ。

と、言ひ訳で。

相変わらずの低クオリティーでお送りする第4話。

前回戦闘描写入るとか言つたけどそれは次回に持ち越しになつた。
サーセン

「なんだよ・・・」れ・・・・

現状報告。

補習を終わらせ、冷蔵庫の補給のために買い物を済ませ。

いや寮まで帰つてみると煙が上がつていた。

どうも火災が起きたらしく、消防隊どころかアンチスキル警備員まで集まつてお
り、既に事態を聞き付けた近所の人間が野次馬と化していた。

「しかもあそこは、確か当麻の部屋・・・・

そつ。主に煙が上がつているのは当麻や俺の部屋がある階だった。

「おーーしつかりしるーー」

この声・・・。

聞こえてきた声に俺は辺りを見回す。

「当麻……」

「レイ……」

見つけたのは、ビルの間に身を潜めていた当麻と、インデックスだつた。

「インデックス……なんでここに……」

「やべえんだよレイ……こいつ、怪我してるんだ……」

「……」

当麻に言われ、インデックスを見る。

表情は青ざめ、抱きかかえる当麻のズボンが、膝から下が血でベットリと濡れている。

「とにかく救急車を……」

「……だい、じょうぶ……だよ」

「！インデックス！」

「とにかく血を……止められれば……ゲホッ」

「おーーしつかりしり……」

苦しそうにむせ、血を吐くインパックスに、俺や当麻に焦りの色が浮かぶ。

「…………とにかく、『じゅま』もともと止血もできねえ……ひょつと待つてや」

そう言ひて、俺は当麻達から少し離れて、携帯を取り出す。

「…………水瀬か？俺だ。今寮の前にいる。今すぐ来てくれ。…………ああ、今すぐだ。それと、救急箱と包帯もだ。…………ああ、頼む」

「レイ……？」

「レイ……イ……？」
「5分もしないうちに水瀬が来てくれる…………それまでの辛抱だ

息も切れ切れに、インデックスは俺の名前を呟く。

あの時もひと本氣で止めなれば、あのときこいつの言ひた事を信じてやれば、今こいつはこんな田には会わなかつたのか？

俺の中に渦巻くのは、そんな後悔の念ばかりだった。

「レイ様！！」

唐突に聞こえた声に振り向けば、そこに立っていたのは黒の燕尾服を着こなす、眼帯をつけた麗人。

道路沿いに付けた黒のクラウンから降りたそいつは、駆け足でこちらに近づいてくる。

「レイ、誰だ？ この人・・・」

「レイ様、一体何が・・・？」

ほぼ同時に聞いてくる当麻と水瀬。時間が惜しい今は、一人の質問には答えない。

「水瀬、親父のマンションまで頼む。救急箱は車内か？」

「え、ええ・・・」

「お、おいレイ！！」

困惑する水瀬や当麻の間を素通りし、車へと向かう。

「後でちゃんと話す・・・今はそいつを助ける事が先だ」

「・・・言い出したら聞かないことはお前も同じだもんな・・・解つた、急げ！」

「・・・かしこまりました」

「うひして俺達は、クラウンに乗り込んでその場を後にした。

」

「ついたぞ・・・

「え・・・？あの・・・レイ・・さん？なんかの間違いじや・・・

「ボケてる場合か・・・行くぞ」

レイは畠山としている当麻を無視して、水瀬と共に中へと入つてい
く。

運転中のクラウンがたどり着いた場所。

そこは高級住宅街の一角、超がつきそうなほどの高層マンションの
前だった。どれくらいの高さかと言えば見上げれば首が痛くなるほ
どと言えば大まかには伝わるだろう。

当麻は一般的な高校生だし、普段からスーパーのチラシなどには目
を光らせるほど彼の財布事情は普段から乏しい。

そんな彼がこんな所に用事があるなんてことは当然今の一 度も無く。

自分の存在が今この場において恐ろしく場違いであると感じ、しか
しあも当然の如くズカズカと入つていく友人を見て、恐々とした足
取りでその後を追つた。

「・・・・・」

「・・・・・」

「・・・・・」

エレベーターに乗り込んだ一人を見て、慌てて当麻も乗り込んだ。が、二人が口を開く気配は一向に無かつた。

(ぐ、空氣重つ！――！)

ついでに言つと、エレベーターのスイッチはパネル式になつており、行きたい階を入れてからボタンを押せば、その階にたどり着くようになっている。

現在パネルには、デジタルの赤い光で『40』と表示されている。

(つまり40階につくまでこの海底みたいな重みに耐えろつてのか
!?)

本気で勘弁して欲しい。このままではインデックスよりも先に自分

が窒息死すると当麻は思った。

「……インデックス。喋れるか……？」

ふと、レイは当麻の方に振り返り、今は当麻の脇におぶさっているインデックスに問いかける。

ちなみに、ここに来るまでに車内でとりあえず止血だけは済ませた。しかし、依然として危険な状態であることには変わりない。

「……レ……イ……？……う……ん……大丈……分……
だよ……？」

途切れ途切れになりながらも、インデックスは必死に言葉を紡ぐ。

「お前がもつてる10万3000冊の魔導書とやらの中には、傷を治す様なものは無いのか？」

「……あるには……あるよ……？でも……あなた達には……
・「うん……学園都市の人には、魔術は使えない……」

魔術とは、元々能力を持たない人間が、能力を得るために生み出したもの。

「能力の無い人間」のために組み上げられた術式^{システム}と儀式は、“回路”が違う「能力のある人間」には使う事が出来ない。

「目的は同じでも手段が違うから相容れないわけか・・・」

科学も魔法も、元は無力な人間が力を得ようとして、道を模索する手段に選んだものだ。

しかし、アプローチの仕方が違う分、互いに反発しあうのだらう。

「そんな・・・」

「ここまで来て、助けられねえのか・・・？」

当麻の顔に、悔しさと歯痒さが浮かぶ。

「・・・能力者じゃ無けりや、魔術は使えんのか？」

「う、うん・・・」

レイの問い掛けにゆっくりと頷くインテックス。その様子を見て、レイは安堵したかのように息を吐いた。

「なら問題ない。水瀬は能力者じゃないから、多分できるはずだ

「……ホントかレイ！？」

「頼めるな？水瀬」

集まる視線に、今まで黙っていた水瀬が口を開く。

「……ちゃんと説明してくださるなら、お引き受けします」

「……信じる信じないかは、お前次第だが？」

「元より、レイ様を疑つたりはしません」

「……解つた。当麻もそれでいいな？」

「あ、ああ……」

チン

小気味良いベルの音と共に、奇妙な浮遊感が足元を伝つ。

「とりあえず、込み入った話はインデックスの怪我をじうにかしてからだ」

そう言つて、レイ・水瀬・当麻・インデックスの4人は、エレベーターを後にする。

（

案内された部屋で、当麻は再び驚愕していた。

広々とした空間、ゆったりしたソファ、巨大な薄型テレビ。

目に映る全てが自分とは縁遠いものばかりだった。

「気になるか？」

物珍しく辺りを見回していた当麻に、レイは問いかける。

「レイ？」

「思えば俺は、自分がどういう人間かは、あまりお前に話した事は無かったしな・・・どうする？」

「どうするって・・・」

懶々問い合わせると書つ事は、聞く氣があるなら話してくれると書つ事だ。しかし同時に、レイの放った言葉には、拒絶の色が見て取れた。

できれば聞いて欲しくない。

苦笑するレイの表情^{カオ}が、そう言つているように感じる。

「……いや、無理には聞かない。いつかレイが話したくなつたら、そんときに頼むわ」

「……わつか」

『警告。第一章第六節。

出血による生命力の流出が一定量を超えたため、強制的に「自動書記^{ヨハネの}」で覚醒します』

リビングでぐつたりと横たわってい筈の、インデックスの声。

しかし、紡がれた言葉には霸氣も生氣も無く、ただ機械的に感じるような冷たい声。

直後、インデックスの体がふわりと浮きあがり、無風のはずの室内で來ていた修道服が揺ら揺らと靡く。

『現状を維持すれば、私の体はおよそ15分後には必要最低限の生命力を失い、絶命します。

指示に従つて、適切な処置を施していただければ幸いです』

「聞いての通りだ。インテックスの事は、一回お前に任せる。頼むぞ水瀬」

「解りました」

「行くぞ当麻」

「あ、ああ・・・・」

レイに促され、当麻は彼に着いて行こうとする。

「あ、あのー」

「?」

「当麻?」

「そこの事、よろしくお願ひしますっーーー。」

水瀬へと振り返った当麻が、腰を曲げて勢い良く礼をする。

田の前の少年の突飛な高度に、水瀬は少しばかり驚き、そして優しく微笑んだ。

「最善を取って貰わせていただきます。ですから、どうか安心を」

あれから、部屋の外に出た俺は、玄関前で当麻から何があったのかを聞いた。

当麻の部屋の前で倒れていたインデックス。

それを追つてきた炎を扱う『魔術師』と名乗った男。

そして、インデックスの言っていた10万3000冊の魔導書の在り処。

「嘘じやあ無かつたつて訳か・・・」

『この世に“ありえない事”なんて無い』とは誰の言葉だったか。やつぱあの時信じてやれば、こんな結果には為らなかつたのかと思うと、無性に悔しくなる。

ただそれよりも腹立たしい事と言えば・・・

「おー、当麻。てめえ何で俺に連絡寄越さなかつた?」

「そ、それは……」

いい辛そうに口籠る当麻。まあ、こいつの考える事何ぞ大体予想が付く。

「大方、俺を巻き込みたくねえとでも思つたんだろ?」

「…………」

図星、見てえだな。

「つたくよお・・・今更だがてめえは一人で抱え過ぎだ。第一インデックスについてはあん時俺も居ただろうが。無関係だとでも言ひ張るつもりか?」

「・・・悪い

「・・・はあ。まあいい。今度やつたら右頬に一発だ。いいな?」

「ああ・・・」

渋々と言つた感じで頷いてる当麻だが、こいつの事だ。どうせまた知らねえ間にいろんな物抱えるに決まつてやがる。

まあ、約束は取り付けたし、その時には思いつきりブン殴らせてもらひうが。

「レイ」

「あん？」

「…………ありがとな」

「…………ふんっ」

ホント、今更だつづの。

「それにしても、効果合つたんだな『イマジンブレイカ-幻想殺し』」

「ああ。これならどんな魔術師が相手でも問題ないぜ」

「アホ。右手限定なんだから下手すりや即死だらうが

「つと、そuddた」

妙な所で調子に乗りやがつて……。

しかし、その魔術師の男が操つた炎にも効く何ぞ、ますます意味不明だな幻想殺し。

俺は最初当麻に聞いたときは、個々人が持つAIMやその根幹たる“バランスル・リアリティ自分だけの現実”に干渉する能力だと思っていた。だが、インデックスから聞いた魔術の大まかな原理を聞くに、対象となるのは異能を元に発生する“力”全てなのだろう。

そもそも、幻想殺しが異能を殺すなら、幻想殺し自体が死ぬはずだとも思つ。

まあ、それについては考えるだけ馬鹿らしい矛盾だ。自分の右手に右手じゃ触れないみたいなもんだる。

五十歩百歩の方がまだました。

「御二人とも。一先ず落ち着きましたので中へ」

言いながら、玄関を空けた水瀬。とりあえずは、水瀬にも話したいてやるべきだな。何より話すつて約束しちまつてるし。

まあ、水瀬なら、親父に話が行く心配もないだろ？

部屋へと戻ったレイと当麻。

室内に入ると、黒革のソファに寝かしつけられているインテックスの姿があった。とりあえず峠は越えたのだろう。今は顔色も良く、

安らかに眠っていた。

それからレイは、カーペットの上に胡坐をかいている彼に、対面する様な形で正座している水瀬に、当麻も交えながら事の経緯を説明した。

「まあ、魔術云々については、この田で見てしまったので否定はしません」

説明を聞きながら、水瀬は数分前の出来事を思い出す。

今でこそ安らかに眠っている少女が、先程まで血だらけで今にも死にそうだったのだ。

それを目の前で、しかも一瞬で直してしまったのだから、信じない訳にもいかなかつた。

「とりあえずはこの子の着るものと、何か栄養のあるものを買って来なければなりませんね」

(着る物つて・・・この人こいつのサイズわからんのか?って言づかインデックスのこの服は一体・・・)

「服のサイズくらい見れば解ります。あと、今着せてるのはレイ様の子供の頃のお古です」

「心を読まれた!？」

「ゴントはいいから、早く行って来い」

レイのシッ「」に詫され、立ち上がる水瀬。

「レイ様」

「あ？」

背を向けながら話しかけてきた水瀬に、レイは疑問符を持つて返した。

「どうやら随分とお変わりになられた様で。この水瀬、大変嬉しく思います」

「・・・そうか」

「ええ。それでは、行つてまいります」

そのまま玄関へと足を運ぶ水瀬の、嬉しそうな横顔が、当麻には見えていた。

水瀬が居なくなつて、なんとなく部屋の空気が重々しくなつてしまふ。

沈黙。

「・・・・・」

(もう言えば水瀬さん、レイの事様付けて呼んでたよな・・・)

思えば当麻は、隣で沈黙を貫いている友人の事を詳しく知っている訳ではない。

自分の高校の水準よりも数倍上だらう頭脳の持ち主で、大型バイクと免許持ちで、護身用に格闘技を習つてゐるらしくて、少し口が悪くて、でも根は優しい奴で、ツンデレで。

知つてゐる事と言へばそれくらいだ。

本人が言いだすまで聞かないと言つた手前、今聞くのは憚られる。

第一相手の家庭事情を掘り葉掘り聞くなど、お世辞にも行儀が良いとは言えないだらう。

そう思い、当麻は敢えて聞かない事を選択したのだが。

「・・・水瀬は俺の執事兼教育係だ」

「レイ?」

「聞きたいんだろ?顔にそう書いてあるや」

「うえー?マジでか?」

何たる醜態だらうか。無意識とは言え顔に出でていたとま。

自分の節操の無さに当麻は落ち込んでしまつ。

「何独りでダウンしてんだよ・・・。別に構わねえさ。丁度いい機会だ、そこのシスターが起きるまでは話してやる」

それから、レイは当麻の質問に、ポツリポツリと答えていった。

レイ自身の正体、今住んでいる寮にいた理由、水瀬との馴れ初め等々。

彼が所々大雑把に話していたせいもあってか、実際には1時間と経っていないだろ？

しかし、当麻にとってはまるで一日分語り明かしたかのように感じるほど、濃い内容に感じた。

「そういう訳だったのか・・・」

「ま、我が事ながら随分ガキっぽいとは思つけどな」

そう締めくくるレイの表情は、酷く呆れた様なカオで。

当麻には、何だかそれが、寂しそうにも感じた。

「・・・ん・・」

「！？インデックス！？」

しばらくして、寝苦しそうにしていたインテックスが目を覚ます。

心配そうにインデックスの傍に寄る当麻とレイ。

「気分はどうだ？ インテックス！」

「・・・レイ・・?・・うん・・大分楽・・だよ?」

「そ、うか・・・」

「・・・ごめんね？・・・こんなにメーワク掛けるつもり、無かつたのに・・・」

「ファン。メーワクついでだ。」の際お前も全部吐いちまえ

・・・・解つたんだよ・・

“必要悪の教会”^{ネセサリウス}。

同じ十字教の中で、“対魔術師用”的技術に最も長けたイギリス清教における、魔術師を討つ為に、魔術を調べ上げ、対抗策を練る特殊機關。

「私は一度見たものは絶対に忘れないから、彼らの手によって10万3000冊の魔導書を……呪き」まれた

「世界中の魔術を知れば、世界中の魔術を中和できるはずだから。でも」

「お前を狙つてる連中の目的は、別にあるつてのか？」

当麻の問い掛けに、インナーテックスがゆっくつと頷く。

「私の頭の中を使えば、世界の全てを捻じ曲げる力だつて手に入れられるの」

再び訪れた沈黙は、先程よりも一層沈鬱としたものになつた。

(リアル世界滅亡の危機ってか? つうか、こんな年端もいかねえガキに、なんつうもん背負わせやがんだ……)

インナーテックスの口から語られた真実は、およそ彼女ほどの年の少女が背負う様な物では無かつたのだ。

自分の心に渦巻く感情が、より一層濃さを増していくのをレイは感

じた。

「…………」めんね

話を聞いて押し黙ってしまった二人を見て、インデックスは申し訳なさそうにポシリと咳く。

ベチッ

「ひやつー？」

そんなインデックスの顔田掛けて、濡れタオルが投げつけられる。

ぶつけられた勢いに押され、そのままソファに倒れ込んだインデックスは、投げてきた犯人の顔を見やつた。

「ふざけるなよ。お前が今言わなきゃなんないのは“『めんなさい”じゃねえだろ？”

顔を伏せる彼の言葉に、インデックスは困惑し、レイは“ああまたか”と言つた風に溜息をつく。

「“助けてくれ”、だろ？」

「当麻……」

「……はあ。つたくお前は相変わらずのお人好しだな、当麻」

「レイ……」

「かかわった以上、この馬鹿一人に任せるのは不安だからな。俺も協力してやる」

「……ふえ……」

二人の言葉に、インデックスの目尻に涙が溜まる。

それを見た当麻は『やっちまつた』と狼狽し、レイはそれを見て『当麻が泣かせた』とからかい。

そこにちよつと帰ってきた水瀬も加わり、やや騒がしくなるのだが。

「……では少々割愛させてもらおう。」

少なくとも、現時点を持つて、少女は一人では無くなつたのだ。

（

レイのマンショニより少し離れたとある場所に、一見妙な格好をした人影が二つ。

一人は、2メートル程の長身に、全身を覆うように纏つた漆黒のマントと、炎のように紅い髪の青年。

もう一人は、女性の様で、肌の露出の大胆さ以外については、ある程度普通のジーンズや白いTシャツに、纏めても尚膝下まで届く黒髪のポニーtail。しかし、その手に持っているのは、異常なまで

に長い、鞘に収まつた巨大な刀。

「あの建物に？」

女性の方が、目の前にそびえ立つ高層建築を見ながら、隣の青年に尋ねる。

その問いに、青年は頷く事で答えた。

「やられ際に追跡の刻印ルーンを張つて正解だつた。これ以上事が大きくなるのはごめんだが」

「私たちにも、あの子にも、残された時間は少ない。急ぎましょ」

自分達の使命の為に、二人は前へと踏み出す。

その時

「んばんわ」

金髪の青年が、二人の行く手を遮つた。

五話目（前書き）

いつも、白眉です。

久々に短めの期間で更新に成功しました。

今回は色々初登場の人とかが居る訳ですが、果たしてこんな一人称で大丈夫か、ちゃんと原作に近いキャラを出せているか果てしなく微妙です。

では、第五話目。どうぞ

「こんばんわ」

魔術師　スタイル＝マグヌスは困惑していた。

時刻は深夜。

一般人ならどうに眠りについてる時間だ。

路地裏などを溜り場にする様な人間がいたとしても問題無い。

ここ周辺には人払いのローンを張った。この都市の人間で気付ける者など片手で足りるほどの数しかいないだろう。

だが、田の前の少年は違つ。

その姿から察するに、恐らくは男なのだろうが、月に背を向けて立つてゐる為に影が差し、その表情は窺えない。

しかし、ただ呆然と立つてゐるだけのはずの彼から感じる、言い知れない威圧感。

そして何よりも、人払いのルーンを張つてゐるにも拘らず、彼がここに存在し、あまつさえこちらに声を掛けてきた。

ステイルの警戒心と懷疑心を搔き立てるには、十分な要素が揃つていた。

「・・・あなたは？」

「神裂、無視しよう。今は一刻も早くインデックスを・・・」

目前の少年に話しかけようとした同僚 神裂火織に、ステイルはスルーすることを提案した。

自分達の目的はあくまでも彼女を保護する事。こんな所で余計な時間を見つてゐる場合ではない。

しかし、スタイルの正論に、神裂は静かに首を横に振つて否定する。

「いいえスタイル。どうやら彼は、私達をここから先に通すつもりなど微塵も無いようです。貴方も薄々気づいてるんじゃない？」

「……できれば気付きたくは無かつたんだがね」

やれやれと言つた風に肩を竦め、彼は懐から数枚のカードを取り出す。

五芒星の中心に文字の様な物が書かれたそれを、彼は空中にばら撒く様に放り投げる。

すると、宙に撒かれたカードは、まるで一時停止のようにピタリと止まる。スタイル達と少年を囲むように四方八方へと飛び、地面や街灯、建物の壁などに張り付いて行く。

「……赤い髪に黒マント。背は異様にデカかつた……だつたか？あんたが魔術師つて事で間違いないよな？」

「……そうだと言つたら？」

「別に。ただ確認したかっただけだ。勘違いで他人をボコッちまつたんじゃあ、情けねえにも程があるからな」

本当に興味が無さそに、少年はただ確認のためだけに聞いたらしい。ここまで声に感情を感じないと言うのも、おかしなものだと、

スタイルは背筋が寒くなる思いだつた。

「……一つ、いいでしょうか?」

「あ?」

神裂が手に持つたを大太刀を油断なく構えながら、少年へと聞いた
だす。

「あなたはなぜ、私たちの邪魔をするのです?」この都市の人間には、
あの子の中の魔導書を使う事は出来ない つまる所、あの子を
庇い立てる理由は然程無いと思いますが?」

「……」

しばしの間を持つて。

少年は氣だるそうに溜息を吐くと、頭を書きながら面倒くさがりに
喋つた。

「確かにお前らの言つ通りだ。俺はあいつのことなんてなんとも思
つかない。」

いつもよまえの正義感なんてのも持ち合せちゃいな。

元より魔術は専門外だし、ぶっちゃけお前らの事だつてどうだつていいさ。

魔術師だろーが、奇術師だろーが、手品師だろーが。
たとえ人殺しみてえな頭のイカレたやつだとしてもだ。

でも あいつにとつての敵なら、話は別だ。

あいつの敵は、俺の敵だ」

瞬間、少年がスタイル目掛けて、弾丸の様に突っ込んでくる。

対して、神裂がスタイルを庇うように、二人の間に割つて入った。上段から放たれる右ストレートを、鞘に収めた大太刀で防ぐ神裂。

「ぐうっ！…！」

叩きこまれた拳の威力に、神裂は膝を着く。この事実に一番驚いたのは、拳を受けた本人ではなく、庇われたスタイルの方だった。

そう。少年が放った拳は、異常なまでに重かったのだ。少なくとも

スタイルから見れば、聖人の力を持つ神裂に膝を着かせるなど、普通の人間には到底できない。

なら、それがこの少年の力なのか？

身体能力の強化。ありきたりではあるが、脅威にはなりえない。ならなぜ？自分はこんなにも焦っているのだろうか？

「スタイル！」

「つー！下がれ、神裂！！」

神裂の一括に、スタイルは渦巻いていた思考を切り替える。

スタイルの指示に、神裂が少年を弾いてその場から飛び退く。同時に、スタイルは少年との距離を詰めた。

『炎よ
ケナズ

スタイルの手中に光が集まる。

その色は、燃え盛るような赤。

『巨人に苦痛の贈り物を』

宙を裂くように振るわれるスタイルの腕。

それとまったく同じ軌道を描きながら、彼の手の平に燐つっていた火花が、爆発的に膨らみ、空間で爆ぜる。

一瞬にして生まれた業火は、目の前の少年^{（イレギュラー）}と視界を呑み尽くした。

「……やった……のでしょうか？」

一連の動作を見ていた神裂が、スタイルに問いかける。

「わざわざ炎剣まで使ったんだ。相手が能力者でも、力を使う暇すらなかつたさ」

先程使つた魔術は『吸血殺しの紅十字』。

摂氏3000度にも及ぶ炎の剣は、たとえ相手が不死の一族でも、一瞬にしてその肉体を蒸発させる。

先の戦闘では無効化されてしまったものの、それは相手の方が異常^{（イレギュラー）}だつただけで、この魔術そのものが無くなつた訳でもない。

タイミングも、動作も完璧に決まつていた。生きている筈もない。

しかし、スタイルの心は未だ焦燥感に囚われていた。

“早くこの場から去るうつ” 勝利の要因が、逃げる事への言い訳に感じるほど、彼は焦っていた。

パチンッ

「どうした、神裂！－早・・・く・・・」

立ち止まってしまった彼女を疑問に思いスタイルもまた振り返った。振り返つて、しまつた。

そこには、先程まで猛威を奮っていた炎は何処にも無く。

死んだはずの金髪の少年が、最初に会ったときと変わらない表情で二人を見ていた。

絶句。

同時に、思考が一気に乱されるのを、スタイルは感じた。

そして、彼の中で疑問が一つ氷解する。

出会いつて最初の彼に、あれだけ警戒した理由。

片付けた筈なのに、逃げたくなる様な気持ちに駆られた訳。

それら全てが

少年に対する“恐怖”なのだと

魔術師　　スタイル＝マグヌスは悟ったのだ。

降りしゃる雲。

田瀬とした意識の中、わたしは田を覚ました。

頭を上げ、見上げた空に映るのは、灰色に淀んだ雲が覆い尽くす景色。

「ユダなきや・・・」

逃げる？誰から？

解らない。でも、何時までもじつとせしてこられない。わたしは、危険だから。

重たくなった体を引きずる様に、歩き出す。

街中を、宛ても無く歩く。

「…………？」

右も左も、覚えのない景色。いや、知らない景色だ。

口つい

街行く人々から向けられる奇異の目も。

知りもしない景色も。

会つたことも無い自分を追う何かも。

自分が、誰なのかさえ分からぬ事も。

目に映る全てが、まるで恐怖の対象で。自分一人が、取り残されてしまった様になる。

「誰か

」

「・・・・・」

息苦しい。

また、一人だつた時の夢を見た。

体中が、汗塗れになつちゃつてる・・・。

「・・・・・んつ」

田に溜まつてた涙を拭う。何だか、嫌なもの見つけたなあ・・・。

「・・・・・起きたか

「ひやー・?」

「朝から奇声上げんな、喧しい・・」

ビ、ビックリした・・・。

“‘喧しこ’なんて、女の手に使つ言葉ぢやなこと思ひつけへ。レイ

「生意気な事言つてんな・・・・」

頭を書きながら、レイは面倒臭そうにじつちを見てる。

と語りか

「エプロン？」

「あ? ハプロンがどうかしたか?」

どうかしたって言うか……なんだか意外過ぎるね。

レイは見た目が不良みたいだから、家庭的な印象つてゼロなのに。

一
・
・
・
何だよ

いや、似合わないなあつて

「殴るぞ？」

「ちつ違う！違うんだよ！！ただ意外って言うか驚きがあつただ
けで悪氣があつた訳じゃないのだからゲンコツは勘弁してえええ
え！！！！！」

「・・・悪意が無いのは認めてやるが言葉のチョイスに棘を感じるな・・・」

レイは震えながらも何とか振り上げた右手を収めてくれた。

「うう・・・レイのゲンコツはとっても痛いから勘弁して欲しいよ・・・」

「おひ、もう飯できつから、黒麻の奴起こして来い

「ゴハンー?」

グウウウウウウ

おお・・・忘れてたけど、『』飯って聞いたら即座に反応したんだよ。さすがわたしの体。健康な証だね。

「目聴い腹してやがるな・・・」

「む・・・失礼しちゃうな。元はと言えばレイの『』飯が美味し過ぎるのでいけないんだよ?」

正直レイの家事スキルは神がかってるね。あんなにおいしい『』飯が作れるならお店始めてもいいんじゃないかな?

「お前は食いたいのか食いたくないのかどっちだ」

「誰も食べないなんて一言も言ってないんだよーーー!」

「解った解った……わざと行って来い」

促されたわたしま、ベッドから飛び起きてドアまで歩く。おこし一
ご飯が待ってるなり冷める前ことつまを起しねことね。

もしもすぐ起きなかつたら近麻の分の」飯もおこしへ頂こちやうか
む。

ドアノブに手を掛けた所で、ふと、思に出した。

「…………レイ……」

「あ？」

急に振り返つたわたしを見て、レイは不思議そつな顔をした。

「…………じめんね？…………」

「…………何なんだ、急に」

「ひとつまは『じめん』なんて言つなかつて言つたけど、やっぱり、
謝るよ。わたしが、あなた達を巻き込んだのは、事実だから」

「…………」

無三。

それからレイは、呆れるような顔でわたしを見て、呆れたよつて溜息をついて、面倒くさがりに頭を搔きながら、いつ言った。

「俺は“謝る”って言つのはあんまし好きじゃねえな。懺悔だの何だのつつのは、要は許されたい、罪を浄化して身軽になりたいってわけだしな。

お前がそういうつもりで謝るんじゃない、俺からすりゃ迷惑ただけだ」

「…………はは……」「

手厳しいなあ…………。

何だか、見透かされた気分だ。もううん、申し訳ないって気持ちは嘘じやない。でも、レイの言つ通り、許されたいって気持ちもあつた。

「だから。謝るくらいなら、次どうすりやいいか考えろ。躊躇つたりなんてするな。半端に関わられるのが一番面倒だしな」

「…………頼つてもいいの?」

あつと、無事じや済まない。

下手したら、死ぬことだって充分考えられるの。

「お前みたいなガキが、一丁前に遠慮なんかしてんな

「…………レイって“つんでれ”? だね

「待て」「ララ誰から聞いた」

「とうまが言つてたよ? レイは“ つんでれ” だーって

「いい根性してやがんあのウーネ頭・・・・! 」

何だかレイが怖い。笑顔なのに目が笑つてないよ。

きっと近いうちにまたとうまが“ 不幸だー” って叫ぶかもしれないね。

「レイはどうまが大切なんだね」

「・・・・ホントさつきから何だお前? 」

レイはギョッとしたような、変な物でも見るような目でこっちを見た。さつきの“ ガキ” 呼ばわりの意趣返しは成功したみたい。

言葉や態度は少し乱暴だけど、レイは本当にとうまが大切なんだと思う。たった数日しか二人の傍に居なかつたのに、一人の呼吸は凄くピッタリで。

そんな一人を見てたら、なんだか懐かしい様な、羨ましい様な。ちよつとだけ、寂しい様な。不思議な気持ちになつた。

そんな事を思いながら、私はひとまを起しこして部屋を出る。

（

「 もうひーーーまたですか鷹崎ちゃんーーー」

職員用駐車場の端に響く、子供っぽいソプラノ。

バンティットを止めて降りた所を丁度発見されてしまった。一応言つとくが免許は持ってるだ?

最初のころは駐輪所に止めてはいたんだが、群がる自転車の中、一角だけ大型バイクと言つ場景があまりにもシユール過ぎたため断念。

丁度いいスペースがあつたため、職員用の駐車場、その端の端を間借りする形になつたわけだが。

当然、職員用なのでエンカウント率は高い。何人かの職員は黙殺するか苦笑してさらりと注意する程度なんだが、彼女　こと月詠小萌に至つては存外ねちっこかつた。

初登校当初から続いているこのやり取りは、半ばこの高校の恒例行事と化し、こちらを遠巻きに見る生徒のクスクスと言つ微笑が聞こえるくらいだった。

「何度も言つてるじゃないですか！まだ未成年なんですからバイクで通学するのはダメですよ！」

「外見と実年齢がチグハグなあんたに言われたかねえよ

「またそういう事を言つー！」

俺の煙に巻く様な態度に、月詠女史はなかなかに怒り心頭らしい。

それから10分近くこんなやり取りが続いたわけだ。やれ、危ないだと。やれ、バスがあるからそちらを使つべきだとか。

別に俺はこの人の事が嫌いってわけでもない。心配してんのは伝わるし、親身になつてくれるのにはありがたいことだらう。

ただ、やはり少々鬱陶しく感じるのと、この年齢層の少年少女特有の反抗^{反抗}氣のせいだらうか？

あの雜食男^{あおがみ}なら、喜び勇んで息を荒くするんだらうが。

「おはよー、タカやーん！！」

そんな折だ。土御門^{バガ}がこいつにやつてきたのは。

「小萌センサーもおはよー、」

「おはよー、」

互いに朝の挨拶を交わすちびっ子と土御門。和氣藹々とした空氣の
筈が、俺からすればそうは見えなかつた。

土御門元春 「うちのクラスにおいて、二馬鹿^{デルタフオース}の一角を担つ男だ。

胡散臭さが服を着て歩いてるよつた奴だと、俺は認識している。あ
あ、あと重度のシスコンか。

「ん~タカyan、カ///やとは今日も来とひんのかにやー？」

「あ、ああ。まあ・・・な・・・」

「確か、10年ぶりに義妹さんと再会したんでしたつけ？」

「いやあ、まさか力ミヤが隠れシステムだったとは」やー

「・・・」

ん?誰の事かつて?インテックスと当麻の事に決まってんだ。

今、当麻は久々に再会を果たした妹の為に色々と世話を焼いていると言つ、トンデモ設定になつている。

水瀬をあの部屋に常駐させる方法もあつたが、タイミングの悪いことに親父から急な呼び出しがかかつたせいで、しばらく日本を離れることになった。

結果、インテックスを一人で留守番させる訳にもいかず、無能力者の俺よりも幻想殺しのある当麻の方が幾らかましだつと言つ事で、当麻が残る事になつたわけだ。

まあその影響で、当麻は実はパソコンだったと言う在らぬ尊がクラス内に蔓延する形になつたんだが、本人には言つて無い。別に怖いとか気まずい訳じゃないぞ?ただ言う必要性を感じないだけだ。

我ながら、無茶苦茶な言い訳だと思つたが、思いの外。ちびっこは溜息一つで追及を止めた。

その代わり、当麻へは他の生徒より5割増しの課題プリントが課せられる結果になつたが。

「いや、いつのを、恵まれてるつづのかね・・・」

少なくとも、不幸ではないだらう。

本当に不幸だと云ひなら、それは一体どんな状況か。想像さえ着かない。或いは、10年前の時も、幸運だったと言えるのかも知れない。

なんせまだ、五体満足で生きてるわけだし。少なくとも、今を不幸だとは思わない。

「鷹竜ちやーん..どうかしたんですかー？」

「早く来るぜよーータカやーんーー！」

「ん?..お?」

鞆片手に、とりあえずは教室へ向かう事にする。

その日の夜。俺は、道の真ん中でボロボロになつてゐる鞆麻を見つけた。

魔術師（魔術師）

「いつも、白黒です。

今日はスタイル達魔術師側メインのお話。
なので、本編的にはあまり進んだ感じがしません。
では、どうぞ～

ロンドン中心部に位置する、『聖ジョージ大聖堂』

そこが、禁書田録インテックスと呼ばれる少女が育つた場所。

「かおりーーーーー」

拙い足取りと言葉で、まだ幼い彼女は無邪気に笑いながら、自身の親友たる存在の元へ駆け寄る。

ボフッ

「お帰りなさい」

元気に駆け寄ってきたインテックスを優しく抱き止めながら、彼女
神裂火織は頬を綻ばせる。

「どうでしたか？バチカンは」

「んっとね・・・暗かつた！あ！あとカビ臭かつたよーー！」

「まあ・・・だ、大丈夫でしたか？何か、嫌な事をされたりなんて

」

「あり得ない事を言うな神裂」

神裂の不安げな問い掛けに答えたのは、彼女ではなく男の声。

声のした方向に立っていたのは、やけに身長の高い人物だった。

体をスッポリと覆つてしまつ程の黒いマント、そのマントに付いた黒のフードを、田深に被るといつ出で立ちだ。

「！」の僕が付いてるんだ

自信たっぷりの声音で、その人物は被つていたフードを取り、炎のよう赤い髪を陽光の下に晒す。

「インデックスに害を成す輩は、半歩だつて近づけさせないーー！」

死靈術書、ソロモンの小さな鍵、“法の書”、テトラビブロス、ア

ネクロノミコト

レメゲトン

スカル

スカル

ア

ルス・ノトリア・・・。

『田を通しただけで魂が穢れる』 そう教会が指定した数多の“邪本”“悪書”。

世界の各地に封印されたそれを、頭の中に写^{ハナ}本し保管する。

それこそが、禁書目録^{インデックス}たる少女の役目。

「ですがやはり、世界中を飛び回って覚えていのが、地下室と本の山ばかりだなんて・・・」

眼前で地面に文字を描いて遊ぶ少女の、余りにも狭過ぎる世界。

それを見て湧き上るのは、憂い、悲愴、同情。

連れ回しているのが自分達だと解つても、やはり、そつ思わずにはいられない。

無邪気に笑っている所を見れば、尚更。

「同じだよどの道。あの子にとっては……ね

「……本氣で言つてこるのですか？」

神裂は、彼が呟いた言葉を聞き逃さなかつた。

それは それでは、余りにも悲し過ぎる。

それでは余りにも、彼女が報われない。

両者の間に、居たまらない様な空気が満ちる。

「か・・おり・・

ふと、神裂は背中に重みを感じ、振り返る。

危うげな足取りで、インテックスがもたれ掛かってきていた。

「インテックス？」

「何か・・・クラクラする・・・。おなかへった・・・のかな・・?
?」

そう言つと彼女は、荒い息遣いのまま、ズルズルと神裂の方に倒れこんでしまう。

どうも様子が変だ。よく見れば、顔も蒼白になり、体はカタカタと小さく震えている。

「インデックス！？」

「待て！何かおかしいぞ！！」

「インデックス！インデックス！！」

神裂が必死に呼びかけても、インデックスは目を閉じたまま、苦し
そうに横たわっているだけだった。

これが、必要悪の教会の魔術師、神裂火織と、スタイル＝マグヌス
が、最初に経験する1年目の、3日前の出来事。

「そりゃ……禁書目録が監視の役、御苦労であつたわね」

「……別に、頼まれてやつているわけではありません」

教会内の一室、さまざまな調度品が不規則に飾られたその部屋で、女はスタイル達への労いの言葉を口にする。

それに不快感を覚えたスタイルは、眉をひそめて投げ遣りな言葉を返す。

「あら、 そうなの」と微笑を浮かべるその女は、 どうでもいいこと言った態度で、 窓の縁に腰を下ろす。

侮蔑と嘲笑を含んだかのように見えたその笑みに、スタイルは心の中に黒い感情が燃るのを感じる。

「アークビショップ
最大主教！！」

「無い」

「他に・・・他に方法は無いのですか！？ インテックスの記憶を消す以外に手立ては・・・」

焦燥に駆られる神崎の言葉を、女は取り付く島も無く即答してのけた。

「重ねて申せし事だけど、 そのままでは“アレ”の頭がパンクして、死に至れるのも時間の問題でしょうよ」

チグハグな喋り方で、女は語る。

「人間の脳の中で使える容量は存外小さなもの。其れを“忘るる”ことによって、『いらない記憶』を整理し　百余年もの長きにおいて、脳を動かし続けていられるのだけれど・・・」

「完全記憶能力者のインテックスにはそれが出来ない」

スタイルが紡いだ言葉に頷きながら、直も女は語り続ける。

「さにありけるのよ・・・ただでさえあれの脳の85%は10万3000冊の魔導書の“知識”で埋め尽くされている訳だし。

残り15%で“忘るる”ことのできない禁書目録が普通の生活を送るには、一年周期で記憶を削つてやる他に術は無からづ」

「これも禁書目録が為」

そつ語る女の、表情^{カオ}に浮かべた笑みは。

「最大限の、人道的処置なのよん」

どこか、胡散臭いものだった。

（

先の部屋とは別の一室。

手当たり次第に掻き集めたのだろう、部屋中に散らばっている古本や骨董品には統一性と言つものがまるで見受けられなかつた。

中には読めるのかどうかすら分からぬ文字で書かれた物や、風化して今にも崩れてしまいそうなボロボロな物まであつた。

「結局、全部無駄だつたか」

無数の本に埋め尽くされた室内を見回して、スタイルはそう呟いた。

この部屋にある物は全て、彼が“ある目的”的に集めたものだ。無論、中には自分の力の研鑽のために手に入れた物もあるだろうが、その力もまた、彼自身が目的のために欲したものだ。

「クソッ」

置いてあつた一冊を手に取り、スタイルはそれを机の上に叩きつける。

地上に散らばっていた用紙が風で宙に舞つた。

自分を取り囲むかのように置いてある本棚が。そこに詰め込まれた本が。床上に乱雑に積まれた書籍や、適当に放られた道具が。

その全てが、自分を嘲笑つているかのように感じた。

自分なりの方法で、自分にできる範囲で。最大限、目的を成すための努力をした。してきた、つもりだった。

しかし、結果は先程告げられた通り。自分では、何の役にも立てないと、そう痛感せざるを得なかつた。

余りに無力。全ては徒労に終わり、希望どころか夢さえも見出せない。

一番近くに居る筈なのに。“守る”と、そう言つたはずなのに。一番守りたいものに對して、こんなにも無力だ。

何より一番許せないのは、こんな結果しか出せない、自分自身。

湧き上がつてくるのは、苛立ち、不甲斐なさ、歯痒さ、申し訳ないと言つ懺悔。

「スタイルうへへへ・・・・

そんな折だ。今の彼の心境とは全く逆方向の声が聞こえてきたのは。

「イ、インテックス！？頭痛は！…もう大丈夫なのがい！？」

「うん！お腹いっぱい食べたらね、治つかけた！…」

慌てふためくスタイルとは裏腹に、あどけなく笑って返すインテックス。

「最近よくなるんだよね。“ジビヨウのシャク”ってやつなのかな？」

いや、それは違うだろ？・・・。

彼女のボケに、内心突っ込みを入れるスタイルだった。

ふと、インテックスの視線が、机の上に向かつ。

その机の上に置かれた、メモ用紙ぐらいの小さな紙に書かれた模様は、彼女が見慣れた物とよく似ていた。

「これってルーン？こんな見たことないかも

もっと良く見てみたい。

ちょっとした好奇心に駆られ、その紙に手を伸ばす。

しかし、その紙を引っ手繩る様に自分の懷に隠したスタイルによつ

て、結果宙を掴むだけに終わる。

「ステイル？」

「あ、いや・・これはその」

「何々？何があるの？」

「別に、大した物でもないよ・・・」

「ええ～！～気になるよ～」

食入るように聞いてくるインデックスに、ステイルは根負けしたようすに肩を竦める。

「これは・・・大切な人を護る為に創った、新しい文字だよ」

「新しいルーン・・・」

「けど、未完成なんだ・・・禁書目録たる君が見る様なモノじゃないよ」

「あのね、ステイル」

少女は、言った。

インデックス

「私の中にはね、たくさんの魔導書が溢れてて、ゼリの国の文字だつて千年前の呪文だつて、書き出す事が出来るよ」

「でも 新しいものは創れない」

「それは・・・キミは魔術師じゃないんだし」

「ううん」

「すごいよ、魔術師スタイルは」

笑っていた。

ただ純粹に、無邪気な顔で。

その魔術が、インテックス自信を苦しめているところだ。
命さえ、奪つてしまおうとしているのに。

「違う

違うんだ。

「僕は、ただの半人前の、未熟な魔術師にすぎない」

君を助けることすらできない、無力な魔術師にんげんだ。

でも

「君は違う。常人なら一目見ただけで発狂しかねない、十万三千冊の管理者だ」

「この世でたった一人、君と言つ存在にしかできない事なんだ！」

君以外の存在には成し得ない。君だからこそ。

「・・・そつ・・・かなあ・・・・？」

「そうだとも！」

氣恥ずかしそうに問うたインデックスに、スタイルはハッキリと答える。

彼にとつてそれこそが、ルーンを刻み続いている理由だった。

聖堂地下にある神殿、その中心に位置する場所に、
禁書目録は横た
インデックス

わっていた。

眼は閉じられ、息は荒く、顔には生氣の色は無い。苦しんでいる事が見て取れる今の彼女の状態は、時間制限タイムリミットが近い事を示していた。

「もう限界です……早く処置を！彼女の苦痛を取り除いてあげてください！」

友の身を案じた神裂が悲痛な叫びを上げる。

その言葉に、彼女達の周りに居た黒装束が、構えながら何かを呟き始める。

「…………に…………」

苦しみに苛まれながらも、周囲の空気が変わり始めた事に、インテックスは薄らと開けた視界で気付く。

「大丈夫です。少しの間眠つていれば、すぐに楽になりますから……」

「…………う…………う…………」

せめて不安にさせまいと、神裂はインテックスに優しく語りかける。

「苦しいのですか？インテックス」

「い・・・や・・・・・だよ・・・」

「私・・・・忘・・・れない・・・忘・・・れ・・・た・・く・・・な・・い・・・!」

かおりも・・・スタイルも!

絶対・・・忘・・・れ・・・ない・・・から・・・つ・・・!」

クシャクシャに泣きじゃくりながら、インデックスが紡いだ言葉。

事ここに至つても、彼女にとつては自分が死ぬことより、大切な人たちを忘れてしまう事の方が、何十倍、何百倍と辛かつたのだ。

「・・・インデックス」

神裂は、ジーンズのポケットから、一枚の紙切れを取り出し、彼女に手渡した。

「お護りです。私たちが、これからも良き仲間ともでいらっしゃるよう」

それは、なんの事は無い、一枚の写真。

嫌がるスタイルを、インテックスが強引に引く様に抱きついて、憤慨した彼を神裂が宥めている。

神裂が記念にと思って持ってきたカメラで、3人で撮った唯一の一枚。

普段から文明の利器に頼ることの少ない彼らが、唯一形の残る手段で作つた。

解りやすい絆の証。

心のどこかで、こんな平穀が続けばいいと思った

彼女が笑つていて、それに釣られる形で、自分や神裂が笑いだす

逆があつても良いだろう。僕や神裂が、彼女を笑顔にする。そんな平穀を

「・・・スタイル」

「・・・解つてゐる」

促されたスタイルが、ゆっくりとインテックスに歩み寄り、その手を彼女の頭にかざす。

ポウツと零れ出した光は、どこか、寂しさを思わせる様な灰色で。

もしも君が、何もかも忘れてしまったとしても
せめて僕だけは、何一つ忘れずにいよう
願つた平穏も、抱いていた理想も
君が僕に、教えてくれたことも
だから

「安心して、眠ってくれ。インテックス」

「・・・クソツ！－」

苛立ちのままに、近場にあつた電柱に、拳を叩き付けた。

途端、右手に痺れる様な痛みが走る。

「・・・・しつかりしろよ、上条当麻つ－－」

この上なく、俺は焦っていた。

インデックスに定められたタイムリミット。何より、あの魔術師は
今夜零時に、インデックスの記憶を消すと言つた。

俺一人じゃ、今の状況は到底覆せない。

「考える・・考えるんだ・・・」

インデックスは記憶し続けることで頭がパンクしちまう。

だつたら、記憶を止めて眠らせでもすれば、時間稼ぎにならないだ

うづか？

「あんま悩んでる時間は無いんだよな・・・」

駄目だ・・・一人で考えても息詰まる。

誰か、脳医学か精神関係で解る人間がないと・・・。

「そうだ・・・あいつならーー。」

迷ってる暇はない。急いで連絡を

「つて、携帯壊れたんだった・・・」

俺は辺りを見回して、公衆電話を見つけた。

幸い、レイから借りてた分の小銭があった。

硬貨を入れて、番号を押していく。

もしもし？

「レイ、俺だ」

当麻？そつか、起きたのか・・・つたく、要らん心配掛けやがって

「悪い、説教はあとでたっぷり聞くから。今直ぐ話したい事がある

・・・・今どこに居るんだ?

「時間が無いんだ。頼む」

・・・どうせなら直接聞く

「ひむ」

後ろから声がして、俺は振り返る。

「・・・・レイ」

そこには、出かけるときいつも着ていた黒革のツナギ姿のレイが、携帯を耳に当てながら、片手を上げていて。

その姿に、俺は奇妙な安心感を覚えていた。

それから俺は、あの魔術師たちから聞いた事を、一字一句間違えず説明した。

あいつらの目的も、それを行う理由も、インテックスの記憶の時間制限も。

俺の説明を聞いてるレイは、頷いたり、相槌を打つたりすることも

なぐ。終始無言だった。

「…………って訳なんだが…………レイ……？」

「…………」

おかしい。レイは手を組んでぎつと俯いたままだ。まさかレイに限つて寝てたなんてオチは無いよな……？

「レイ？ 聞いて…………？」

思わず顔を覗いて、俺は絶句した。

苛立ちを押さえる際に唇を強く噛み過ぎたんだろう、口元からは血が垂れていた。よく見れば、組んでいた手からも血が滴り落ちている。

レイはブチキレたんだ。それも半端じゃない位。

4年ぐらいの付き合いになるナビ、ここまで怒ったレイなんて見た事が無かった。

「…………行くぞ、当麻」

「つひーおーレイー！ 行くつて……」

「決まつてんだる。インナックスの所にだ

レイはせつ言いながら、近場に止めてたバイクから、俺にヘルメットを投げて寄越す。

「だ、だってまだ、何も解決してないだろ！？」

「お前、まさかあいつらの言つ事全部本気にしたんじゃないだろうな？」

それってもしかして、あいつらが嘘をついてるかも知れないってことか？

そう悩んでいる俺を見て、レイは呆れたように溜息をついた。

「な・・・何だよ・・？」

「・・・多分、お前今度の記録術もとあつも落第だ」

「アー！？なんで今記録術もとあつの話になるんだ？しかも落第つて・・・。

「とにかく戻るが。零時までそいつらの時間もない・・・どうこう事かは走りながら説明してやる」

「・・・解った」

とりあえず納得して、俺はバイクの後ろに跨った。

レイがハンドルを捻ると、エンジンがかかり、独特な音と共に、足元のマフラーからガスが吐き出される。

ヘルメットをかぶった俺は、振り落とされないよう、ハンドルを握るレイの腹に手をまわした。

「ざけんなよ、クソが」

レイが何かを呟いたみたいだけど、エンジンの音で俺には聞こえない
かつた。

附註四（後書き）

・・・はい、いかがだったでしょうか？

バトル的な展開とかは次回になります。と言つか予定してゐる魔術師
編は次回も含めて2話分。

やつとこひと佳境に入り始めました。

それでは次回もお楽しみに。

ではでは～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7875q/>

とある重力の星殺し《スタースレイヤー》

2011年9月9日13時10分発行